



紙と遊ぶ

川淵三郎

僕が子どもの頃は年一回「大掃除の日」があり、町内の各家庭が一斉に掃除をした。小学校の高学年になると年末の障子の張り替えという大役が与えられた。

古い障子を悪者に見立てて拳で破るのは爽快だった。もう一つは障子全体にお湯を掛けて剥ぐ方法。こちらは濡れた紙が途中で破けないようにするのに集中力が要するため、うまくできると達成感が味わえた。

糊はご飯粒を柔らかく溶いたものを用いた。それを刷毛の先を使って棧や組子に付け、そこに新しい障子紙を乗せる。はみ出た部分にカミソリで切れ目を入れ、それをするすると一気に剥がすのも気持ちよかった。

仕上げは霧吹きだ。水を口に含んで一気に吹きかける。それが乾くと紙がピンと張り、障子張りは完成となる。今も障子の張り替えは僕の担当だ。昨年暮れに久しぶりにスプレー容器を使わずに口で霧吹きをしたところ、霧状になるどころか棒状に飛びだしてしまい、我ながら情けなかった。

夏の大掃除は畳上げで、各家庭の玄関先や庭には二枚の畳を山型に立てかけたものがいくつも並ぶ。パンパンと叩く音とともに埃が舞うのが夏の風物詩だった。畳の下に敷かれていた古新聞を家族と語らいながら読むのも楽しかった。

僕らの幼少期は町の行事が頻繁にあった。子どもたちも一兵卒として駆り出され、そこで地域の風習や生活の知恵を学んだ。遊びは三角ベース野球や相撲などもっぱら外遊び。竹馬などの遊び道具も自分たちで作った。

いま記憶を辿ると、「紙」も僕ら子どもたちの遊びに深く結びついていた気がする。新聞紙で兜や刀剣を作ってはチャンバラごっこをした。中でも難しかったのが、和紙と竹ひごで作る和風だ。上手に出来たと思っても、いざ揚げようとするとき高く揚がらないことがしばしばあった。児童文学者の吉岡たく先生の下で演劇をしていた僕は、先生に教えてもらって人形を作ったこともある。水に漬けて柔らかくした新聞紙で型を取り、それを和



かわぶち・さぶろう ● 大阪府生まれ。日本サッカー協会相談役・日本トップリーグ連携機構会長。早稲田大学卒業。大学在学中の1958年に日本代表となる。60年、W杯チリ大会予選に出場。61年に古河電工に入社。64年、東京五輪に出場。80年、日本代表監督に就く。88年、日本サッカーリーグのプロ化をけん引し、91年、Jリーグの初代チェアマンに就任。2002年、日本サッカー協会第10代会長に就任。名誉会長、最高顧問を歴任。14年から日本バスケットボール界の改革に関わり、Bリーグ創設に尽力。

日本サッカー協会ラウンジにて

紙で包んで顔にする。人形の顔はそれぞれユニークで皆と品評会をしては笑い合った。

自動化やIT（情報技術）の発達などにより、日本人の生活形態はこの半世紀で様変わりした。子どもの遊びもゲームが主流になり、外遊びが減少している。筆圧が弱くて六割以上の子どもが2Bや4Bの濃い鉛筆を使っていると聞いたときには愕然とした。

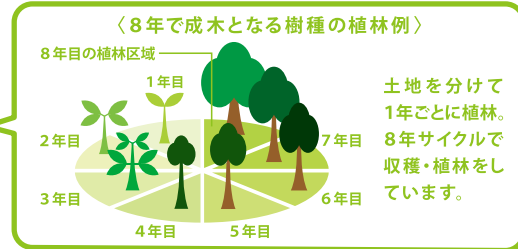
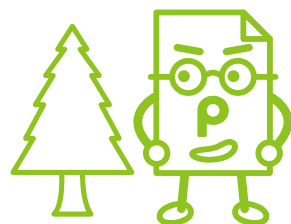
勉強だ、塾だと言う前に外遊びができる環境を整備すべきだ。集中力や持久力は正しい姿勢を維持できる体力や筋力があって保てるものだし、工作など指先を使うことで知能が発達する。大人や年の違う子どもと遊ぶことで、生きるために必要な知識や社会性が身につく。

テクノロジー礼賛の世の中だが、便利になるだけが幸福ではあるまい。AI（人工知能）に脅かされないために、ここらで原点回帰することも必要なのではないだろうか。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙づくりは、「森想い」なんです。

まず植えて→育てて→伐ったら→また植える。植林で森をうまく循環させながら、紙をつくっているんだって。これらの森のほとんどは、もともと使われていない牧草地や荒地だった場所。製紙会社は、自然の森に迷惑をかけないように、森をつくりながら紙をつくっているんです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、[「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。](http://kamitsubu.com/) <http://kamitsubu.com/>

今回は 7月5日号、宮下奈都さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo: Shiro Miyake